

今、振り返る教師としての原点

私を育てた  
あの時代、あの出会い

# 学校が変わる感動を原動力に 教師として学び続ける

静岡県立湖西高校 大野 達雄

仕事の全体像が見え、自分は一人前だと感じる時は誰にでもいつかは訪れる。だが、そこで成長をやめるのか、向上の途を進むのかで、その後の運命は分かれる。より大きな感動を求める日々を選んだ大野達雄先生が、きっかけとなった出会いを語る。

まだ一人前ではない



教科指導でも  
生徒指導でも、  
自分は一人前の  
教師だ——30歳

を目前にした私は、そう自負していませんでした。そんな私の考えが間違っていることを教えてくれたのが、私よりも1年後に静岡県高校に赴任した小関直樹先生です。

実は小関先生は、高校時代の恩師の1人です。高校生の頃は、大学生活の思い出などを話してくれる、楽しい先生という印象でした。しかし、自分も教師となって再び会った先生には、もっと別の魅力がありました。

廊下から先生の世界史の授業

をのぞいた時の衝撃は、今も鮮明に覚えています。生徒全員が背筋を伸ばして、授業に集中しているのです。頬杖などともないことです。こんなに緊張感の漂う授業があるのかと思いました。

その上、小関先生の元には多くの生徒が進路相談に訪れていました。もし自分があれほどの緊張感の中で授業をしたとしたら、生徒は自分を慕ってくれるだろうかと考えました。更に小関先生の教えるクラスは、全国模試でも信じられないくらい良い結果を出していました。担当教科が違うことなど言い訳にはなりません。私は、小関先生から学びたいと思いました。

先生の授業を参考に見直した

ことの1つが板書です。ノートがそのまま参考書になるような見事な板書をまねしようと思っただけです。授業の準備にはそれまで以上に時間が掛かりました。板書の内容を精選したこと

で、生徒が書き写す時間が減り、授業のテンポが格段に良くなりました。自分が一人前だなんてとんでもない。教師としてまだまだ勉強することはたくさんあるのだと実感しました。

皆で学校を変えていった

当時、静岡県高校には30代前半の教師が私を含めて4、5人いました。若手同士仲が良く、喫煙室などで和気あいあいと話をしていました。小関先生はそこに足を運ぶようになったので

すが、小関先生が加わったことで、その場の雰囲気次第に変わっていききました。

先生は私たちに「生徒は大きな力を秘めている。だから教師もそれに応えよう」と熱く語り掛けました。私たちは次第に先生と同じ気持ちになり、思いを語り合うようになりました。そして、学習合宿参加者の成績の伸び率、部活動加入状況と成績の相関などユニークな視点でデータの分析を行い、資料として次々に発信していきました。

小関先生がアイデアを出し、私たちはそれを形にしていきました。面倒だとは一度も思いませんでした。小関先生は受け持った生徒を見違えるほど伸ばしている。それならば、自分たち

先輩教師の言葉

生徒の成長に感動し、  
次の感動を求め、  
また努力する

静岡県立藤枝東高校 教頭  
小関直樹



大野先生たちとは「この学校をもっと良くしよう」と本音で語り合いました。模試結果を見ながら、「入学時の成績のままなら180人は国公立大に合格するはずなのに、実際には半分以下。これで生徒を育てているといえるのか」「方法さえ変えれば学校はもっと良くなる」と何度

もけしかけました。皆、熱意も実力もありましたから、その気になるとものすごく力を発揮します。いろいろなアイデアを出し合い、実践しました。大野先生はよく「この取り組みがうまくいくか、まさに勝負ですね!」と言っていました。「やりなさい」と一方的に言われたことだったら、あんな雰囲気

皆、熱意も実力もありましたから、その気になるとものすごく力を発揮します。いろいろなアイデアを出し合い、実践しました。大野先生はよく「この取り組みがうまくいくか、まさに勝負ですね!」と言っていました。「やりなさい」と一方的に言われたことだったら、あんな雰囲気

\*プロフィールは取材時(2012年3月)のものです

左 おぜき・なおき 地歴・公民科。富士高校、富士宮西高校などを経て静岡東高校に11年勤務。その後、教頭として藤枝東高校へ。

撮影◎静岡東高校にて

右 おおの・たつお 数学科。清水東高校(定時制)を経て、静岡東高校に5年勤務。その後、静岡高校の教壇に立ち、現在は湖西高校に勤務。3学年主任。



は先生の言葉を、何より生徒が本来持っている力を信じてみようと思ったのです。そして、着実に伸びていく生徒の姿が、私たちの原動力になっていったのでした。

たばこを吸わない先輩教師がわざわざ喫煙室にやってきて、「こんな観点で成績分析してみては？」とアイデアをくれたこともありました。また、3年生

の担任を務めた時は、センター試験後の出願先の検討を、小関先生に協力してもらいました。資料を広げて徹夜で話し合っているとき、聞きつけた教師が次々にやってきて、「この生徒にはこの大学が合っているのでは？」などとアドバイスしてくれました。分掌や学年を超えて、皆で生徒を伸ばそうとしていることを、私は確かに感じました。

そして、この集まりは進路検定会としてその後も受け継がれていきましたから、まさに学校が変わる1つの瞬間だったといえます。その後、私は異動しましたが、進学実績や部活動の伸びなど学校の躍進を外からも感じていました。

あの頃から10年が過ぎ、当時の小関先生と同じことが自分に出来るだろうかと考えます。そして「今、先生に会ったら怒られるな」と思ってしまう。さまざまな生徒と接する中で、「生徒が悪い」と思ってしまうような時もあります。しかし、すぐに「そんな言い訳を해서는ダメだ」と自分に言い聞かせる。小関先生のように生徒を信じ続けたいし、皆で力を合わせて学校を変える感動をまた味わいたい。そう思っています。

にはならなかったでしょう。もっと良い学校にしようと、全ての教師が当事者意識を持ってかわっていました。皆がお祭りみたいな気分を味わっていたと思います。

10年経った頃には、国立大の合格者数は約2倍になりました。生徒の表情、生活態度、そして学校全体の雰囲気が一変し、生徒はここまで成長するのかと感動しました。素晴らしい経験を生徒にさせてもらったと思います。

その分、静岡東高校を去る時は辛かったです。立場も管理職に変わり、教師としてのあり方を再考しています。あらためて「生徒にとって良い教師とは、どんな存在か」と角度を変えて考えています。

どんな立場でも、学校がもっと良くなっていく感動は味わい続けたいのです。成果はすぐに出るわけではないし、生徒に対してがっかりすることも多々あります。でも、9回やってダメでも、10回目に生徒は良い表情や反応を見せてくれることがあります。その瞬間、教師って良い仕事だなあと心底思います。

生徒とのふれあい、そして彼らが味わせてくれる感動があるから、頑張れるのです。